

つなぐ ——— 小家、技・家の教育情報誌 ——— ひらく

2026

Volume

03

KGK

JOURNAL

家庭

特集

暮らしと
エネルギー



KAIRYUDO



INTERVIEW

タズネル

最小のエネルギーで、最高の快適さを 「永く使える家」から考える未来

株式会社MUJI HOUSE

Kawachi Koji 川内 浩司

「無印良品」が家をつくっていることを知っていますか？そこには、永く使い続けられない日本の住まいに対するちょっとした違和感と、未来の地球で快適に暮らすためのヒントが隠されていました。「無印良品の家」の元開発責任者の川内浩司氏に、これからの住まいとエネルギーの関係についてお話を伺いました。

「鉛筆から家まで」—無印良品が 家づくり始めた理由

もともと私たちは、インターネットなどを通じてお客様と「こんなものがあつたらいいな」と語り合いながら商品をつくる会社でした。今でも愛されている「体にフィットするソファ」や「持ち歩ける明かり」も、そんな対話から生まれた商品です。

ある時、お客様から「消しゴムも、筆箱も、それを入れる棚もあるのに、なぜ棚を入れる家が無印にはないの？」という声をいただいたのです。それが家づくりの原点でした。調べてみると、当時の日本の家は平均27年で建て替えられていました。35年もローンを組んで買うのに、払い終わる前に壊してしまうなんて、もったいないと思いませんか？「一度つくったものを、ゴミにせず、永く大切に使い続ける。」そんな当たり前のことを

家でも実現したい。私たちの挑戦は、そこから始まりました。

太陽を味方につける、 心地よい設計

これからの住まいで大切なのは「最小のエネルギーで、最高の快適さを得ること」です。省エネと聞くと「照明を使わないようにする」「冷暖房を我慢する」といったイメージがあるかもしれませんが、私たちは少し違います。「エアコンよりも、おひさまの熱で温まるほうがずっと気持ちいいから、この家を選ぶ。」そんなポジティブな感覚を大切にしています。

その秘密は、自然の力をそのまま借りる「パッシブデザイン」という設計の工夫にあります。例えば、私たちの家には1.8メートルもある深い「庇」がついています。高い位置から照りつける夏の日差しはしっかり遮り、低い位置から差し

▼「陽の家」の庇

▼「木の家」の開放的な空間



▲陽の家

▼仕切りのない間取り

▼インフラゼロハウス

込む冬の光は、部屋の奥までたっぷり取り込んでくれます。

これに、熱を逃がさない魔法瓶のような「断熱性能」を組み合わせました。窓には熱を通しにくい3枚重ねのガラス(トリプルガラス)を使い、家全体の温度を一定に保ちます。自然の力を上手にコントロールすることで、たった1・2台のエアコンで家中が心地よくなるのです。

家族の変化に合わせて 「姿を変える」家

無印良品の家のもう一つの特徴は、部屋の中を細かく壁で区切っていないことです。なぜだと思いますか？

実は、家を壊す理由の多くは「古くなったから」ではなく、家族の人数が変わって「使いにくくなったから」なのです。例えば子育て中には子どものために個室があったほうが良くても、子どもが巣立ち、夫婦2人の生活になれば個室があるより広いリビングがあったほうが使いやすいかもかもしれません。

そこで、私たちは「後から自由に形を変えられる仕組み」をつくりました。構造に関係のない壁や家具で仕切ること、ライフスタイルに合わせて家をアッ



プデートしていく。こうすれば、家は30年で壊す消耗品ではなく、50年、100年と受け継がれる大切な資源になります。この考え方が認められ、私たちの「木の家」は住宅で初めて、永く愛され続けるデザインに贈られるロングライフデザイン賞をいただきました。

「インフラゼロ」で、 どこでも自由に暮らせる未来へ

今、私たちはさらにその先、電気もガスも水道も引かない「インフラゼロハウス」の実験を進めています。太陽の光で電気をつくり、雨水をろ過して何度も使う。そんな自給自足ができる家があれば、好きな場所で自由に暮らすことができます。

また、こうした「分散型」の暮らしは、大きな災害が起きてライフラインが止まってしまったときにも、自分たちの生活を守る力になります。

「インフラゼロ」で、どこでも自由に暮らせる未来へ、住まい方はもっと自由にいいはず。エネルギーを自分たちでコントロールし、資源を大切にしながら、誰よりも快適に暮らす。家庭科の授業で学ぶ「持続可能な社会」のヒントは、実は皆さんのすぐそば、毎日の「住まい」の中に隠れているのです。



株式会社MUJI HOUSE元取締役 商品開発部長。「無印良品の家」の開発を統括し、ブランドの基盤を築く。現在はマーケティング部に所属し、自社サイトやYouTube等のSNSで情報発信に従事。開発者としての専門知見を活かし、豊かな暮らしのヒントや住まいの魅力を、コラムや動画を通じて住まい手へわかりやすく届けている。



TOPIC
ミツメル

家庭科が拓く！ 暮らしとエネルギーの未来

東京ガス株式会社 都市生活研究所 所長

博士。東京家政大学 非常勤講師。専門は環境・エネルギー教育、エコ・クッキング。著書に「省エネ行動スタートBOOK」(開隆堂)、「食生活からはじめる省エネ&エコライフ」(建帛社)など。

三神彩子

Mikami Ayako



1 暮らしを支えるエネルギーの現実

人類が火を使うようになってから文明が始まり、火をどう使うかの工夫がやがてエネルギーをどう使うかに発展し、私たちの暮らしを豊かにしてきました。しかし、その便利さの裏側で、エネルギーの大量消費は深刻な気候変動問題を引き起こしています。主な原因は、化石燃料を燃やすことで排出されるCO₂（二酸化炭素）をはじめとする温室効果ガスの増加です。

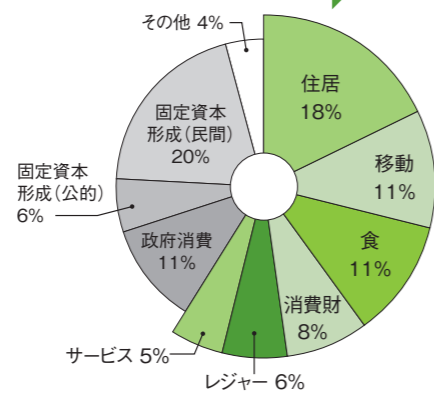
「大量のCO₂は企業が出している」と思いがちですが、日本の産業・業務部門のエネルギー消費量は、1973年度から2023年度までの間、省エネや技術革新で0.8倍と削減方向にあります。一方この間、家庭での消費量は約1.7倍に増加しました。実際に日本全体のエネルギー消費量の約6割は、私たちの生活を支えるモノやサービスをつくる過程で排出されています。つまり、それを使う私たち自身が暮らし方を変えることが、社会変革につながるのです。

家庭で使う電気やガス、灯油の原料の大半は、石油、石炭、天然ガスといった化石燃料です。これらは大昔の動植物の死骸が長い年月をかけて変化したもので、使えばなくなってしまう限りある資源です。しかも、エネルギーの約85%を海外からの輸入に頼っています。

エコロジカルフットプリントという指標をご存じでしょうか。これは、私たちの暮らしがどれだけ自然環境に依存しているかを示すものです。暮らしに必要な生物資源を生み出すのに、地球が何個分必要かという形で表されます。この数値は増え続けており、現時点では世界全体で地球約1.8個分の生物資

カーボンフットプリントから見た
日本の温室効果ガス排出源

家計消費 約6割



環境省「令和6年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」より作成

源を消費しています。もし世界中の人々が日本人と同じ暮らしをすると、地球が2.9個分程度必要になると試算されています。

電気やガス、水がふんだんに使える私たちの暮らしは、実は世界の当たり前ではありません。私たちは本当に恵まれた環境にあることを改めて感じさせられます。この現実を子どもたちにどう伝え、未来へつなぐ力を育むのか。ここに家庭科教育の大きな役割があるのです。

2 家庭科が育む持続可能な社会

暮らしの基盤であるエネルギーですが、普段、意識する機会は多くありません。しかし、気候変動問題は待ったなしの状況にあります。

子どもたちがこの問題を総合的かつ実践的に考えられるようになるにはどうすればよいでしょうか。そこで家庭科の出番です。他の教科と異なり、家庭や地域での実践までを視野に

入れ、持続可能な社会づくりに直接貢献できます。

学習指導要領の前文には「持続可能な社会の創り手」の育成が明記されています。家庭科全体でこの視点を取り入れるのはもちろんですが、特に「消費生活・環境」の内容では、従来の環境リテラシーを高める教育から、持続可能な社会の望ましい選択と行動変容を促す教育へと変革が求められます。

東京ガス都市生活研究所の調査では、環境問題に関心のある人はまだ6割程度ですが、10代の約4割が「学校での環境に関する授業」をきっかけに環境問題を意識し始めたと回答しており、教育の役割の大きさがうかがえます。

サステナッジ教育のイメージ図



そこでこれからはCO₂削減に直接寄与する教育が必要と考え、同研究所では環境省実証事業の一環として省エネ教育プログラムを開発し、教育の効果を検証しました。結果、家庭のCO₂が約5%削減でき、省エネ行動の実践率が約21%向上することを明らかにしました。さらに、実践した子どもの約95%が1年後も省エネ行動を継続できていました。この省エネ教育プログラムは「サステナッジ教育」として、自治体単位で学校の授業へ導入が進んでいます。

授業を受けた子どもたちからは、「省エネ行動について家族と一緒に話し合いました。これからも家族みんなで頑張ります。」といった声が、保護者からは「子どもが省エネ行動を進んでくれたので、心がけるようになりました。」といった家庭全体での変化が報告されています。

また、もう一つ力を入れてきたのが、身近な食生活から環境問題を考える「エコ・クッキング」です。初めての調理がエコ・クッキングであれば、それが子どもたちにとってスタンダードになります。実際に教えた子どもが、食への関心を深め、家庭科教員や栄養士として活躍しているとの報告も多く、大変嬉しく思っています。確実に次世代へとつながっていくのだと感じています。

3 未来へのバトン 家庭科教員発「一歩」の連鎖

未来を担う世代にとって、省エネや環境を考えることは当たり前になります。AI技術の発展で教育が大きく変わる中、子どもたちには「自分で選択する力」がより求められます。家庭科教育も「これまで通り」ではなく、「新しいことにチャレンジ」していくことが、この力を育む鍵となります。

世界ではCCE教育（Climate Change Education）が推進され、気候変動を理解し、緩和・適応できる人材の育成が急務です。イタリア政府のように必須化する動きもありますが、重要なのは、この視点を教育の核に取り入れることです。

持続可能な暮らしの実現には、個々人の行動変容と社会全体の取り組みが不可欠です。「一人の100歩より100人の一歩」。一人の100歩の次は101歩ですが、100人が一歩進むと200歩になります。気候変動問題に立ち向かい、未来の子どもたちの暮らしを守るために、教育する立場にある私たちの取り組みが極めて重要です。ぜひ一緒に、未来を創るための一歩を踏み出していきましょう。



CASE

ジッセン

小学校

青森県の南東部に位置する本校は、全校児童8名の小規模校です。そのため、学年の枠を越えて全校児童と一緒に活動する機会が多くあります。また、地域とのつながりも深く、運動会、学習発表会などの行事や授業で、地域の方々にご協力いただいています。このような恵まれた環境を生かし、食品ロス削減を目指した授業の実践をご紹介します。



青森県八戸市立金浜小学校

寺澤 麻美

Terasawa Asami

食品ロス削減を目指した授業の実践

地域の方と共に

生活科・総合的な学習の時間の中で

近年、食品ロスは大きな社会問題となっています。大量の食料が生産される一方、その約3分の1が廃棄され、環境への負荷や地球温暖化にもつながっています。そこで、持続可能な社会を実現するため、生活科・総合的な学習の時間で、5Rの一つである「リデュース」の視点から食品ロス削減に向けて自分たちにできることを考える授業を設定しました。

昨年度は、全校児童を対象に食育の授業を行い、食品ロスが環境問題や食料問題とかわっていること、食品ロスを減らす取り組みは、持続可能な社会の実現につながることを学びました。この学習を通して、給食では自分で食べられる量を考えて盛りつけ、その量を食べきろうとする姿が見られるようになりました。

今年度は、地域の方をゲストティーチャーとして招き、学校の近くにある柿の木からとった柿を使って、干し柿づく

りに取り組みました。これまで放置されていた渋柿も、日光と冷たい風に当てることで、甘くておいしい干し柿に生まれ変わりました。この体験を通して、食品ロス削減の大切さや、ガスや電気などのエネルギーを使わずにつくることができる、環境にやさしいおやつがあることを知りました。

家庭科「食品ロスを減らす大根料理にチャレンジ!」

6年生の家庭科では、食品ロス削減のために自分にもできることを考え、実践意欲を高めることをねらいとして本題材を設定しました。授業の導入では、ミニトマトやいちごのへたについて「食べるのか、捨てるのか」を尋ねました。子どもたちは迷いなく「捨てるもの」と答えました。

次に、大根の葉について同様に尋ねると、「食べられそうな気はするけど、わからない」という反応で、子どもたちの考えに揺らぎが生まれました。その後、青森県に伝わる保存食「干し菜」を実物で紹介しました。子どもたちからは、「ただの草で、パサパサしていて食べられそうにない」といった声があがりました。しかし、干し菜が実際に料理として食べられてきたことを伝えると、「本当に食べることができるのか確かめたい」という課題意識が高まりました。そこで、地域の方をゲストティーチャーとして招き、5年生での味噌汁づくりの経験を生かし、干し菜汁をつくりました。完成した干し菜汁を食べた子どもたちは、「あ

の葉っぱがこんなにおいしくなるなんて」と驚いた様子でした。また、大根を長期間保存する方法として、漬物のつくり方についても学びました。漬物づくりは、「思っていたよりも簡単。長く保存できるのがすごい」という感想が聞かれました。

子どもたちは、大根の葉を干し菜にして保存することで、捨てずに活用でき食品ロス削減につながることに気づきました。さらに、大根を漬物にすることで、食材を無駄なく使い切る先人の工夫があることを理解することができました。さらに、「自分たちにもできそう」「家でも漬物づくりに挑戦してみたい」と感じるなど、学びを生活に生かそうとする実践意欲が高まりました。あわせて、貴重なお話やつくり方を教えてくださった地域の方への感謝の気持ちを深めることができました。

未来につながる学び

食品ロス削減の学習に取り組んだことで、先人たちの暮らしや知恵の中に、無駄やごみを減らすためのアイデアがたくさんあることを学ぶことができました。教科書だけでは学べない、貴重な知識や体験だったと思います。

また、地域の方に温かく教えていただき、子どもたちも地域を身近に感じ、愛着や誇りをもつことができたのではないかと感じています。この学びが、子どもたちがこれからも地域とかかわりながら、持続可能な社会をつくる力につながることを願っています。



干し菜



大根の皮をむいています



教えていただきながら干し菜を切っています



漬物も完成!



美味しい干し菜汁の完成!



6年生の子どもたちと、地域と学校をつなぐ存在として、日頃からお世話になっている田中たか子さん(写真中央)。優しく穏やかな人柄で、先生や子どもたち、地域の方々から親しまれています。ゲストティーチャーとして、干し菜汁、漬物のつくり方を教えていただきました。地域の暮らしや文化も伝えてくださっています。子どもたちにとっても先生方にとっても、心強い「大先生」です。

皮をむいた柿



体育館のバルコニーにつるした柿



「もの」の価値やものがたりから考える私たちの暮らし

買う・使う・捨てるの視点から豊かさを問い直し、自分も社会も幸せにする選択を



CASE

ジッセン

中学校

私たちの生活を支える「もの」。その価値やものがたりを目を向けることで、ものを大切にしようとする現代の子どもたちの心を育む。そして、決して無限ではない資源と私たちの付き合い方を見直し、よりよい暮らし方を一人ひとりの子どもたちが見いだせることを願い、本実践を行いました。



静岡大学教育学部附属浜松中学校

寺澤 友希那

Terasawa Yukina

はじめに

生活に必要なもののほとんどを、お金を払って購入し、消費することで成り立つ今の私たちの暮らし。近年では、購入や支払い方法などが多様化し、欲しいものをいつでも容易に手に入れることができます。しかし、それらの生産や流通の過程において多くのエネルギーが使われている現実に、どれだけの人が目をつけているでしょうか。ものであふれる現代において、どれだけ「もの」の価値に目を向けられているのでしょうか。

「買う」「使う」「捨てる」から見直す消費

消費という、ものを購入することに焦点が当てられがちですが、購入したものをどのように使うか、使えなくなったものをどう次に繋げるか考えることも、消費者の責任です。ここではまず、今の

社会現状を踏まえた「私たちの消費行動が社会や環境に与える影響」について、浜松市くらしのセンター（消費生活センター）より学びを得ました（図1）。

考えを深めた後、「買う」「使う」「捨てる」の3つの視点から、衣食住のそれぞれの生活場面でできるエシカル消費を考えていきました（図2）。

しかし、社会や環境の未来にばかりに目を向けた理想論では、子どもたちの現実味は薄く、実生活には繋がりません。そこで、社会や環境に目を向けることが、現在の自分の生活にもよい影響をもたらすことへの気づきを得られるよう、エシカル消費を家計満足度で見直す活動を取り入れました（図3）。

これまでの自分の消費行動を見つめ直し、よりよい社会や本当の豊かさについて考えを深めたうえで、自分や家族に合ったエシカル消費を考え実践課題を設定し、家庭生活での実現を目指すよう

図1 くらしのセンター出前講座からの学び



図2 考えたエシカル消費を共有する様子

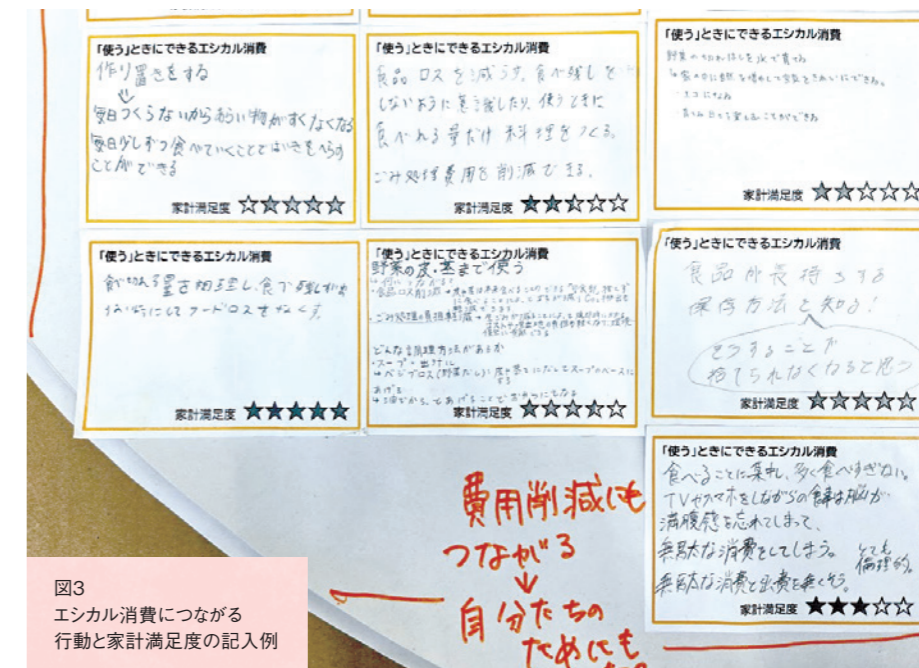


図3 エシカル消費につながる行動と家計満足度の記入例

促しました。こうして取り組まれた実践は、個々の経験談として級友と共有され、互いの新たな気づきを生み、よりよい消費生活のあり方に対する考えを更に深めていきました。

着られなくなった衣服の価値を見つめ・繋ぐ

製作実習では、衣服の生産や流通にかかるエネルギー資源や大量廃棄などの現状に目を向け、自分や家族の着られなくなった衣服を見つめ直し、更なる価値のあるものを生み出すアップサイクルの製作活動を取り入れました。繊維によって異なる性質をもつ布。そんな布の

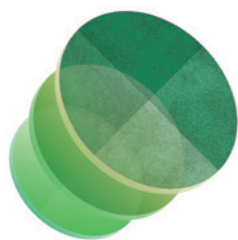
特徴を生かし、つくり手の様々な思いやそこに携わる多くの人々の努力によって完成される一着の服。それが自分の手元に届くまでの過程を考えると、自然と衣服が繋いできた人と人とのものがたりがあることに気づきます。また、その衣服と過ごした日々を思い返すことで、成長してきた自分に気づきます。この活動で大切にしたのは、そのような衣服の価値に目を向けることです。こうして生まれた衣服への愛着は、この先も大切にしたいという思いを生み、子どもたちの製作意欲を掻き立てました。また、愛着のある衣服だからこそ、子どもたちは計画性をもって丁寧に作業を進めていきまし

た。もちろん、上手くいくことばかりではありません。それでも失敗や予想外の展開とも向き合いながら、これまでに習得してきた裁縫技術を活用し試行錯誤を重ね、思い思いの作品を完成させました。

こうしてでき上がった作品は、完成した喜びとともに、再び自分や家族の生活を支えるものへとかえていきます。この活動では、学びのなかで得られる子どもたちの心情の変化と経験を重視し、これらの経験が今後のよりよい暮らしの創造力となっていくことを期待しました。

実際の製作物





INFORMATION

ヒロガル

北海道



1 雪氷熱の利用

北海道では、冬の雪や氷を貯めておき、夏に冷房や冷蔵に活用するシステムを導入している。大きな貯雪庫を立てる初期費用や雪を運ぶコストはかかるが、CO₂の排出量を削減することができる。例えば、札幌市のモエレ沼公園にある「ガラスのピラミッド」では、冬に公園内の雪を貯雪庫に貯めておき、6～9月頃、その雪が溶けた冷たい水を使って館内を冷やしている。

福島県

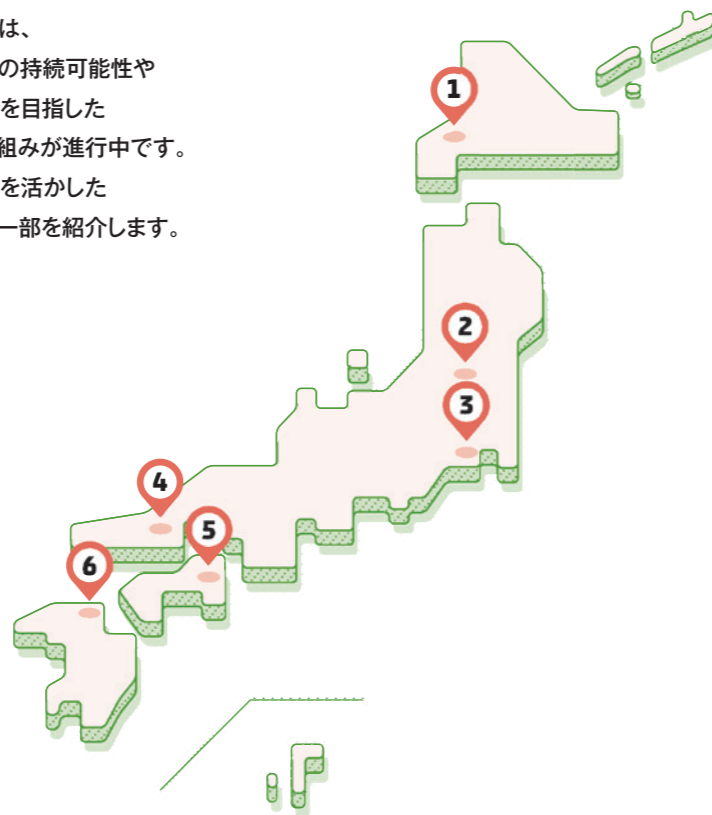


2 エネルギー革命による地域の自立

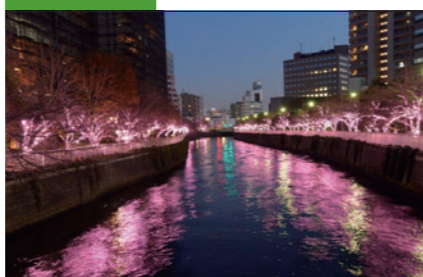
東日本大震災後、地域主導で再エネ事業を立ち上げるため設立された会津電力株式会社。「エネルギー革命による地域の自立」を理念とし、原子力に依存しない安全で持続可能な再生可能エネルギーの普及とその事業を行う。太陽光発電、小水力発電、風力発電など、地域の資源を利用した多様な再生可能エネルギー事業を展開し、その提供を通じて地域の経済や地域文化の自立に向けた地域社会の創造を目指している。

日本各地の持続可能な取り組み

日本各地では、エネルギーの持続可能性や資源の循環を目指した様々な取り組みが進行中です。地域の特性を活かした取り組みの一部を紹介します。



東京都



3 廃食油をイルミネーションに

大崎・五反田の目黒川沿いで毎年開催されている「目黒川みんなのイルミネーション」は、2010年に「街への愛着と誇りを育む冬の風物詩」としてスタートした。その翌年に起きた東日本大震災後の電力不足やエネルギー問題を機に、地域の飲食店や家庭から回収した使用済み食用油を燃料に変えて発電する、日本初のエネルギー地産地消型イルミネーションへと進化した。地域の循環型経済を象徴するプロジェクトとして注目されている。

岡山県



4 木質バイオマス発電

岡山県真庭市は、山林荒廃の原因となっていた間伐材や製材廃材を「木質バイオマス発電」の燃料として有効活用する仕組みを構築した。2015年に稼働した発電所は、市内の全世帯分を上回る電力を供給。売電益を森林整備や雇用へ還元するほか、住民が持ち込む木や枝葉を発電所の燃料として有償で買い取るなど地域内でお金とエネルギーが回る仕組みがつけられている。

徳島県

5 「ゼロ・ウェイスト」の先駆者

徳島県上勝町は、町内から出る焼却・埋め立てごみをゼロにするという目標を掲げ、2003年に日本で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」をした。「ゼロ・ウェイスト」の実現に向け、町民によるごみの14種類44分別を実践することで、リサイクル率は約80%と、高い水準を維持している。不用品のリユースを促進する「くるくるショップ」や、ごみの分別を体験するなど上勝町での暮らしを体感できる「ゼロ・ウェイスト体験型ホテル」の運営なども行われている。上勝町は、2030年に向けて新たにゼロ・ウェイスト宣言をし、「未来のこどもたちの暮らし環境を自分のこととして考え、行動できる人づくり」を目標として掲げている。



福岡県

6 エコタウン

北九州市では、資源循環型社会の構築を図るため、1997年から「北九州エコタウン事業」を推進している。北九州市エコタウンセンターで、「ごみ」として出したペットボトルや家電が、リサイクル工場で「資源」に生まれかわる様子や大規模な自然エネルギー施設を実際に見学することで、ごみを減らす意識やエネルギーの大切さなど、新たな発見・学習ができる。

ゼロ・ウェイストって？
無駄や浪費をなくし、ごみ自体を生み出さないようにしようという考え方。

◀ゼロ・ウェイスト体験型ホテル。上空から見ると、施設全体が「？」の形をしている。社会に対して「なぜ、つくるのか」「なぜ、買うのか」「なぜ、ごみを捨てるのか」というメッセージが込められている。



CO₂を食べる自販機!?

自動販売機は周辺の大気を吸いこみ、それを利用して商品を冷やしたり温めたりしている。アサヒ飲料では、大気中のCO₂のみを吸収するCO₂吸収剤を庫内に搭載し、「CO₂を食べる自販機」として設置している。吸収したCO₂は、コンクリートやアスファルトなどの工業原料として活用したり、サンゴ保全や藻場、干潟、マングローブ林などブルーカーボン生態系の再生に活用される。

開隆堂の教材で 省エネ行動 にふれる

Get Here!



新版 省エネ行動スタートBOOK

省エネ行動について、より学校現場での指導しやすいものにするために、これまでの環境教育のエッセンスをまとめて体系化しました。指導案とワークシートをセットにしています。授業の進め方に合わせ、様々な教科・場面でご活用いただけます。

監修：松葉口玲子、三神彩子
仕様：A4判/80ページ(カラー) 定価：1,760円(税込)



ウルトラ省エネかるた

「家で過ごす」「家事をする」「料理をつくる」「バスルーム・トイレを使う」「買い物をする」の5つの生活シーンでできる70項目の省エネアクションをかるたにしました。

監修：東京ガス株式会社 都市生活研究所
内容：絵札・読み札 各72枚(うち白札各2枚)
定価：2,310円(税込)



改訂 省エネ行動トランプ

衣生活、食生活、住生活と環境の授業で使えるアクティブ・ラーニング教材です。ゲーミングシミュレーションの手法を用いて省エネ行動の学習をすることができます。

監修：杉浦淳吉 制作：暮らし創造研究会
内容：トランプ(52枚、ジョーカー2枚) / 説明書
定価：1,870円(税込)



Q&A

今号のテーマ

どうする、私たちの暮らしとエネルギー

生成AIの普及で、データセンターの電力消費量は、2030年に今の2倍になると…



日本のエネルギー自給率は15.3%^{*}で、化石燃料を使い続けています。一方で、国はCO₂削減目標を、2030年度46%、2040年度73%と掲げ、27.1%^{*}の削減を達成しています。経済的な理由で照明、冷暖房などの利用が制限される「エネルギー貧困」があり、再エネ・省エネ・循環型社会づくりが急務の今、生活者視点のエネルギーの学習をどう扱えばよいのでしょうか。

※2023年度

Q1

家庭科でのエネルギー教育のねらいは？

生活の中のエネルギーと環境の関係を理解し、快適さ、コスト、環境、持続可能性の視点から総合的に判断し、実践する力を育むことがねらいです。生活者の視点からエネルギーをどのように選び、どのように使い、どのように持続可能な暮らしにつなげるかを考え、行動変容を促します。エネルギー消費を社会構造・環境・家計の観点から判断する力や批判的思考力、環境倫理などグリーンスキルの育成が重要です。生活者としての責任と参加のための民主主義教育でもあります。

Q2

学習指導要領では暮らしとエネルギーはどう扱われている？

衣食住や消費・環境の内容に分散されています。

- ①エネルギーの使い方と生活（電気・ガス・水道など、家電製品の使い方、省エネ、料金の仕組み）
 - ②環境への配慮（省エネ行動、再生可能エネルギー、持続可能性）
 - ③消費者としての選択（省エネ機能、コスト、家計など）
- 気づく（小学校）→判断する（中学校）→社会的に考える（高等学校）と段階的に深める構造です。

Q3

エネルギー学習を自分ごとにするにはどうすればよい？

次のような過程で知識ではなく行動変容につなげることが重要です。

- ①生活の中のエネルギーの可視化
（自分の生活とエネルギーのつながりに気づく）
- ②選択で行動が変えられることの実感
（調理方法、冷暖房・家電の使い方など）
- ③わが家の暮らし方での具体化（家庭状況に合う選択肢を考える）
- ④社会（SDGs）との関連（社会の問題が生活問題となっている）
- ⑤自分ならどうするかを考え、行動につなげる

Q4

暮らしとエネルギー×SDGs どんな授業が考えられる？

- 持続可能性を「生活の実感」として学ぶ課題例（SDGs 7・12・13）
 - ・家事の仕方を工夫するとエネルギーはどう変わる？
 - ・季節に合った暮らし方でエネルギーを賢く使う
 - ・私にできるエネルギーの使い方の工夫
 - ・快適さを保ちながら環境に配慮した生活の工夫
- エネルギー教材 参考資料
 - ・開隆堂の教材は本書p.10で紹介しています。
 - ・経済産業省「SDGsエネルギー学習推進ベースキャンプ」

2011年3月11日、東日本大震災によって起きた大規模な原発事故は、「どんな社会をつくり、どんな未来を選ぶのか」を私たちに問うています。



先生方の疑問を募集中！

「Q&A」では、授業づくりや教育現場での工夫について、先生方の疑問・お悩みを募集しています。ぜひお気軽にご質問ください。

今回のテーマは
「コミュニケーション力を育む」

ご質問の
応募はこちら！

